石川県立美術館だより

平成16年9月1日発行　第251号

青銅製銀象嵌紋有翼神獣像　戦国時代
河北省文物研究所蔵

よみがえる

中国歴代王朝展

8月27日(金)～9月20日(月・祝)会期中無休

初夏の花　濱田　観

特集

近代日本画にみる花の表現

8月26日(木)～9月20日(月・祝)会期中無休

目　次

よみがえる中国歴代王朝展 ……2
名物裂と香道具、甦った赤羽刀と郷土の名刀 …3
近代日本画にみる花の表現、鑑賞ファイル …4
常設展示室　主な展示作品 ……5
企画展TOPIC（香月泰男展　第3回） ……6
ミュージアムコンサート ……6
第34回文化財現地見学のお知らせ……6
ミュージアムレポート ……7
各地の展覧会、9月の行事案内 ……7
所蔵品紹介、次回の展覧会他 ……8

URL　http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

企画展示室（第7～9展示室）

よみがえる

中国歴代王朝展

8月27日(金)～9月20日(月・祝)会期中無休

主催／北國新聞社、(財)石川県芸術文化協会
石川県立美術館

青銅製溪伯銘付方鼎　西周時代
甘粛省博物館蔵

青銅製仮面　殷時代
中国国家博物館蔵

本年・二〇〇四年が、中華人民共和国建国五十五周年にあたることから、「よみがえる中国歴代王朝展～至宝が語る歴史ロマン―殷から宋まで～」を開催します。最初に文字を使用したとされる殷（紀元前一六〇〇～紀元前一〇四六）から、北宋（九六〇～一一二六）までの文物百点を紹介するものです。展示構成に沿いながら、出品作品のいくつかをご紹介しましょう。

【初期王朝期の諸文化―中国文明の創成】

青銅製仮面　殷時代

四川省の三星堆遺跡より出土した仮面です。太い眉と杏形の目、高い鼻梁に雲紋で飾られた耳が特徴的で、当時の技術の高さを物語っています。祭祀用に用いられたと考えられます。三星堆遺跡は、二十世紀に発見された古代文明遺跡の一つで、黄河文明とは別に、長江流域で発展した遺跡として重要視されています。

青銅製溪伯銘付方鼎　西周時代

鼎は、祭祀用青銅器の中でも代表的な器で、捧げる動物の煮炊きに用いた足付の鍋です。胴部は獣面紋と龍の一種である夔龍紋で飾られ、足にも獣面紋が施されています。胴の内部に「溪伯作宝尊彝」とあり、溪の領主である溪伯が作らせた鼎であることがわかります。

【巨大帝国の誕生】

鎧甲武士俑　秦時代

中国最初の統一王朝である秦の始皇帝陵の兵馬俑から出土した歩兵の俑です。兜は被らず、髪を丸く髷にしています。膝までの長衣の上に鎧をつけ、短いズボンにすね当て、短い靴を履いています。右手には本来、何か武器を持っていたと思われます。

【激動する東アジア―三国から宋へ】

石彫観音菩薩立像　隋時代

慈善に満ちた表情で微笑む姿が印象的です。正面に「化仏」を飾った宝冠をつけ、そこから下がる繒がなだらかな肩に垂れ、そのまま腕下へと、美しい曲線を描いています。瓔珞（頸飾り）は腹の前の環中で交差し、右手は肘を曲げて蓮華の蕾を、左手は垂れて浄瓶を持っています。洗練された本像は、隋時代の石仏の中でも貴重です。

三彩鎮墓獣　唐時代

赤・緑・黄の釉が施された三彩は、唐時代の文化の象徴として「唐三彩」と称されます。頭部から角・耳が直立していますが、背中から噴出す火炎と同化し、迫力を増しています。睨むような目、牙をむき出した口元、逆毛だった髭から威嚇性を強く感じますが、悪霊を追い払う魔よけとして、墓の入り口に置かれたものです。

問い合わせ先　北國新聞社事業局
〇七六―二六〇―三五八一

◆観覧料

個人	一般	1,200円
	中高生	800円
	小学生	600円
団体（20名以上）	一般	900円
	中高生	500円
	小学生	300円

※当館友の会会員は受付での会員証提示により、団体料金で、ご覧になれます。

鎧甲武士俑　秦時代
秦始皇兵馬俑博物館蔵

石彫観音菩薩立像　隋時代
甘粛省博物館蔵

三彩鎮墓獣　唐時代
甘粛省博物館蔵

常設展示室（前田育徳会展示室）

特　集

名物裂と香道具

8月26日(木)～9月20日(月・祝)

名物裂とは、そのほとんどが中国の宋から清の時代に製作され、鎌倉、室町時代から江戸時代初頭にかけて日本へ輸入された染織品です。その種類は、金襴、緞子、錦、間道などですが、日本では特に茶道の発展とともに珍重されるようになりました。裂はそれぞれの伝来を示す名称を持つことが多く、たとえば高僧の袈裟、名物茶道具の仕覆、掛軸の表装などに使用されたものは、その僧や茶道具、絵画の名が付けられています。前田家では、海外の文物に高い関心を持ち、さらには茶の湯に精通していた三代藩主利常の収集に始まります。寛永十四年（一六三七）、当時唯一の海外への窓口であり、舶来品の宝庫でもあった長崎へ家臣を遣わせ、買い求めました。こうして集められた名物裂は、質・量ともに優れたコレクションとして貴重なものとなっています。今回は金襴、緞子、間道、モールなどを展示します。

香は奈良時代に仏教とともに日本に伝わり、仏前を浄めるための供香として、まず寺院で用いられました。その後平安時代には貴族の間で、香をたいて優劣を競う香合わせが生まれます。室町時代になると、聞香（香をかぎ分けること）の方式と諸道具が定められて香道が成立しました。香道の諸道具は、貴族の趣味から発展したこともあって立派なものが求められ、銘香や名器が愛用されました。そのため陶芸、漆工、金工、木工など優れた装飾を施した名品が数多く残されています。江戸時代の香道具は、組香（数種の香を組み合わせたものを聞き分けることで、源氏香が有名）の発達や茶の湯の隆盛に伴って種類や形式が多彩になり、香七つ道具（火箸、香匙、銀葉鋏、香串、木香箸、羽箒、灰押）などを入れる十種香箱が作られます。今回は前田家の大名婚礼道具の一つである十種香箱のほか、十組盤、四種盤、香割道具などを展示します。名物裂とあわせ、優雅な趣をお楽しみ下さい。

常設展示室（第2展示室）

特　集

甦った赤羽刀と郷土の名刀

8月26日(木)～9月20日(月・祝)

今回展示します刀剣類（赤羽刀）は、第二次世界大戦後、連合国占領軍によって接収されていた刀剣類のうち、廃棄を免れ、その後日本国に返還されたものの一部です。

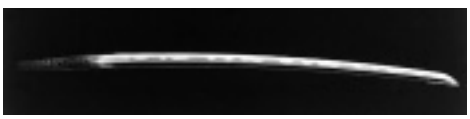
接収された刀剣類の多くは廃棄されたり海外に流出しましたが、廃棄・流出を免れた刀剣類は、東京都北区赤羽の米軍第八軍兵器補給廠に集積されていました。昭和二十二年になり、刀剣関係者の尽力により、連合国軍は、未処理の刀剣類の内、美術的価値のあるものについては、旧所有者への返還を条件に日本側に引き渡しを許可しました。集積されていた数十万本の中から約五五〇〇本が選別され、東京国立博物館において保管されることになりました。こうした経緯から、これらの接収刀剣は「赤羽刀」と称されていました。その後、所有者が判明した刀剣類については返還がなされましたが、残りの刀剣類は国が保管してきました。

博物館では、これまで裸身であった刀剣類を一本ずつ防錆紙に包み、木箱に収納するなどの保存対策を実施してきましたが、ほとんどの刀剣類は錆びた状態で、旧所有者に対する返還とともに大きな問題となっていました。

終戦五十年にあたる平成七年、議員立法により「接収刀剣類の処理に関する法律」が成立し、旧所有者への返還が進められ、残りは国に帰属することになりました。その後、文化庁では平成十一年に約三二〇〇本を公開・活用する目的で、全国の公立博物館などに無償譲与しました。当館でも加州刀を中心に七十本の譲与を受け、研磨・白鞘製作等の整備を行っています。

本展では、整備が終了しました二十七点と越中松倉郷住義弘の短刀、初代兼若の四男で江戸や小田原で活躍した辻村清平の刀等も展示します。また、昨年度ご寄附いただきました花色裾紫糸威六枚胴具足（前田孝和所用）も併せて展示します。

太刀　銘家次



刀　銘賀州住兼若

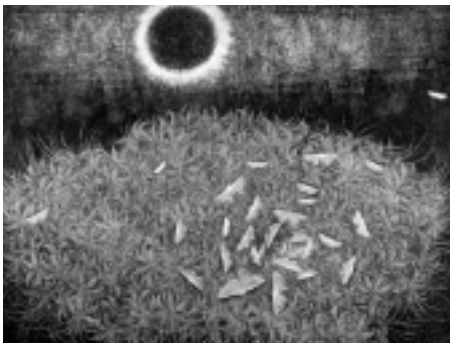
牡丹　藤井観文

常設展示室（第6展示室）

特　集

日本画にみる花の表現

8月26日(木)～9月20日(月・祝)



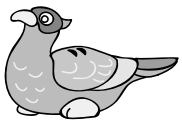
幻花　梅川三省

わが国の自然は、豊かな四季に彩られて多様な様相を呈し、私たちの目を楽しませてくれます。その中でも草花は、季節や場所によって姿形を変え、生活のなかに潤いや刺激を与えてくれる存在として欠かせません。絵画の表現においても、古くから花を描くことが行われてきました。それらは、宗教的な意味を帯びた象徴的表現から、文学性を漂わせるみやびな表現、また、豊かな色彩を駆使して華やかに描かれたものから、墨一色で深遠な生命の鼓動を感じさせる作品など、実にさまざまな描写がなされてきたのでした。

本展では館蔵品を中心に、近現代の日本画のなかで花をモチーフとした作品をまとめて紹介します。そこには、藤井観文の「牡丹」のように、花そのものの美しさを表現したものや、梅川三省の「幻花」のように花と生きものを組み合わせた、いわゆる花鳥画と呼べる範疇に属するもの、さらに玉井敬泉の「白山図」のように風景のなかにおける花の表現などが見られます。こうした近代日本画の花の表現をみていくと、詩情豊かな空間のなかにも、花の色彩や形など、造形的なおもしろさに注目して描かれているものが多いように思われ、作家の個性が花の表情の上に多様に展開しているのがわかります。あわただしい日常生活のなかで、ゆっくりと自然と対話する機会が少なくなっているような今日、あらためて身近に共生している草花の存在を、絵画という一つのフィルターをとおして見つめ直してみてはどうでしょうか。

鑑賞ファイル No.2

青手と色絵



古九谷には二つのスタイルがあります。

一つは器全体を塗り埋めた**青手**と呼ばれるタイプで、老松図平鉢や樹木図平鉢、桜花散文平鉢などがその代表格です。緑・紫・黄の三彩が主調となっており、桜花散文のようにまれに紺青が用いられます。老松図では全体を覆う地文様として花小紋が、樹木図では青海波と水文が配され、それらを背景として豪快に樹木が描かれています。

もう一つは**色絵**と呼ばれるタイプです。白磁に絵の具で上絵付をしたもので、鳳凰図平鉢、鶉草花図平鉢などのように緑・紫・黄・赤・紺青の五彩を用いることが多く、白素地の余白を生かして華麗に描かれます。

創始期の素地は、鉄分やチタン分を多く含み、焼成温度の不足から、やや粗雑な肌合いを呈しており、それを補うために全面を絵の具で塗り埋める青手が主流だったと考えられます。

〈青手〉

青手老松図平鉢

□青手樹木図平鉢

〈色絵〉

□色絵鳳凰図平鉢

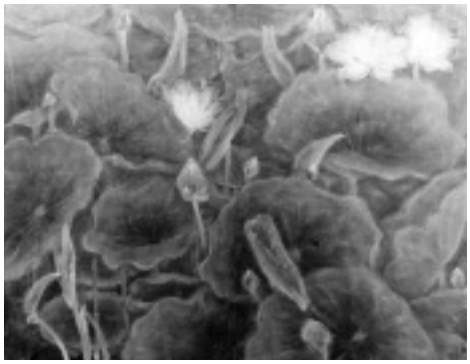
□色絵鶉草花図平鉢

常設展示室

主な展示作品

8月26日(木)～9月20日(月・祝)

◉＝国宝　◎＝重要文化財
□＝石川県指定文化財



浜出清松

前田育徳会展示室

特集　名物裂と香道具

雲繋ぎ宝尽し文様金襴（富田金襴）
花葉松毬唐草文様緞子（笹蔓緞子）
縞格子文様間道（青木間道）
村梨子地唐松唐草御紋蒔絵十種香箱
黒塗秋草蒔絵香割道具

第1展示室

◉色絵雉香炉　野々村仁清
◎色絵雌雉香炉　野々村仁清

第2展示室

色絵牡丹文平鉢　古九谷
□色絵鳳凰図平鉢　古九谷
□色絵百花散双鳥図平鉢　古九谷

特集　甦った赤羽刀と郷土の名刀

太刀　銘家次　室町14～15世紀
刀　銘(加)州藤原住友重　室町14～15世紀
刀　銘賀州住兼若　江戸17～18世紀
脇指　銘賀州金沢住兼巻　寛永11年（1634）
短刀　銘吉家　室町16世紀

第3・4展示室（油彩画・素描・彫塑）

油彩画

鋭角からの円 Rising Sun　勝本冨士雄
1982年　私　鴨居　玲
馬に凭る（B）　高光一也
ペギーの道　藤本東一良
逢う魔が刻の笛の音　吉田冨士夫

素描

自画像　鴨居　玲
タイ・ビルマスケッチ（人物・風俗）　高光一也
おさげの少女　南　政善

彫塑

木陰の女　米林勝二
去りゆく夏　銭亀賢治

第5展示室（工芸）

陶磁

樹映譜　北出塔次郎

漆工

沈金箱「秋すだれ」　前　史雄

染織

譜　堀友三郎

金工

象嵌朧銀花器「岑寂樹林」　中川　衛

木竹工

竹網代茶籠　橋本仙雪

截金

木彫截金香盒「残月」　西出大三

第6展示室（日本画）

特集　近代日本画にみる花の表現

椿壽　畠山錦成
初夏の花　濱田　観
蓮　浜出青松
牡丹　藤井観文
皓　曲子光男

◆観覧料

個人	一般	350円
	大学生	280円
	高校生以下は	無料
団体（20名以上）	一般	280円
	大学生	220円
	高校生以下は	無料

ペギーの道　藤本東一良

去りゆく夏　銭亀賢治

沈金箱「秋すだれ」　前　史雄

ミュージアムコンサート

藤原真理　チェロ・リサイタル

今回のミュージアムコンサートは、こどもから大人まで幅広いファンを持つチェリストの藤原真理さんをお迎えして、チェロのまろやかで透明感のある音色と素敵なトークをお楽しみいただきたいと思います。

【日　　時】9月26日(日)　午後1時30分～
【場　　所】石川県立美術館ホール
【演 奏 者】藤原真理：チェロ
【演奏曲目】J.S.バッハ作曲
　　無伴奏チェロ組曲第１番・第３番ほか
【応募方法】
①往復ハガキでご応募いただき、入場整理券を発行いたします。応募多数の場合は抽選となります。
②往信用ハガキの裏面には「コンサート希望」と明記し、住所・氏名・年齢をお書きください。
③返信用ハガキの表面には、返信先(住所と氏名)をお書きください。
④返信用ハガキの裏面には、入場整理券として印刷する部分ですので、何もお書きにならないでください。
⑤次の注意事項をお守りください。
・応募資格は中学生以上に限ります。
・入場者一名につき、往復葉書一通でご応募ください。
・お一人で何通も出されたものや、連名のもの、記載事項が不備なものなどは無効となりますので、ご注意ください。
・当日キャンセルによる空席が生じた場合は、締め切りまでにご応募いただいて抽選もれとなった方の中から、所定の手続きをとられた方に入場していただきます。
・当館からの返信は、再発行いたしません。
【応募締切】**9月11日(土)必着分**に限ります。
【備　　考】演奏会だけの入場は無料ですが、展示室への入場は別途料金が必要ですので、ご注意ください。

第34回文化財現地見学のお知らせ

今年度の文化財現地見学は、現在下記の予定で準備を進めています。見学コースや日程等の詳細は、来月号に掲載しますので、しばらくお待ちください。

日　　程　10月30日(土)～31日(日)
　　1泊2日
見 学 先　三重県(津市・伊勢市)
見 学 地　高田本山専修寺(津市)
　　三重県立美術館(津市)
　　朝熊山金剛証寺(伊勢市)
　　伊勢神宮内宮・外宮(伊勢市)他
募集定員　45名(対象は原則として成人)
申し込み抽選会
10月24日(日)午前10時より、当館ホールで行います。

企画展TOPIC

「没後30年　香月泰男展」第3回

香月の画業　シベリア・シリーズに至るまで

雲　昭和43年　山口県立美術館蔵

香月は昭和11年、東京美術学校卒業後、1年余り北海道で教員をつとめ、13年1月に故郷山口の下関高等女学校に転任しました。同年結婚。新居を下関市内に構え、翌14年、国画会で国画奨学賞、第3回文展で特選と、画業の進展は目覚ましく、順風の歩みを見せ始めます。しかし日本は戦時下です。17年の暮れに31歳で召集令状を受け、翌年春に満州のハイラルに出征することとなってしまいます。

ですが、香月は絵具箱を持って出征し、ハイラルから家族に宛てて絵入りのはがきを20年3月まで361信も書き送ったのでした。しかも、家族にはこれを保管するようにと最初に命じているのです。これらが『ハイラル通信』と呼ばれ、香月にとっては日記であると共に、手の訓練であり、帰国後絵のモチーフとしようとも考えたものだったのでしょう。軍務中画家として評判となり、水彩絵具や油絵具の送付を家族宛に書き送っていますし、制作した絵を19年の戦時特別文展に出品したりもしているのです。ちょっと驚いてしまいます。

ソ連軍に抑留されたのは20年8月の終戦直後のことで、以後シベリアのセーヤ、コムナール、チュエルノゴルスクの3つの収容所で厳しい労働を命じられるのです。ことに最初のセーヤは苛酷で、30人近い人が亡くなったのでした。しかし、ここでも画家として時に扱われ、絵の仕事を課せられたりもしているのです。画家としての自分を失わぬ香月の強靱さには頭が下がります。

香月の復員は22年の5月のことでした。同年10月『雨〈牛〉』50号を描き、翌年の国画会展に出品。これは後にシベリア・シリーズに加えられる作品です。しかし、この連載の1回目でも述べましたが、本格的にシベリア・シリーズがスタートしたのは、帰国後15年ほどを経てからのことでした。この間香月は日本絵画の伝統と自分の油絵をどう繋げるかということに試行錯誤したのでした。それは梅原龍三郎に師事した段階で既に始まっていたのですが、戦争が中断させていたものでもあるのです。

やがて、香月は『黒のマチエール』を手に入れます。木炭の微粉末を用いて、水墨と油彩を共に生かした美しい黒の絵肌を作り出しました。そして、個性を剥奪された顔を、初のヨーロッパ旅行で、ゴシックやロマネスクの彫像から得るのでした。シベリアの風土と抑留生活を描くために、是非とも必要としたものです。これらが揃ったとき、香月はその思いをキャンバスに描き出せると確信したのでした。　　(二木伸一郎　学芸専門員)

※「没後30年　香月泰男展」の会期は9月25日(土)～10月24日(日)です。

ミュージアム　レポート

ギャラリートーク
6月26日(土)「古九谷今昔」

「古九谷今昔」と題したこのトークは、第5展示室の特別陳列「古九谷へのまなざし」が、古九谷の美的価値を再認識することを趣旨として開催されたことを受けたもので、第2展示室から始められました。

古九谷は斬新な意匠性と、それを可能にする飽くなき技法の追求に大きな特徴がありますが、昭和・平成期の名工たちの作品にも、その伝統が明らかに息づいていることを確認することができました。同時に、現代作家の旺盛な知的探求心を思うと、古九谷の生産に関与した人々の精神的背景の深さは容易に想像することができます。今回は研究成果の披露もかねて「色絵鶴かるた文平鉢」がキリシタンの「絵解き」であるとの解釈を紹介しましたが、その後の多くの方からの熱心な質問の数々など、愛好者の方々の古九谷に対する「熱いまなざし」を痛感した次第です。

7月24日(土)「古九谷再興九谷」

恒例となっている特集展示です。現在、館蔵品、寄託品あわせて約220点の中から、古九谷17点、再興九谷31点、あわせて48点の作品を展示しました。

まず、古九谷、再興九谷の名称の由来、それぞれの窯の特徴、作品の見所などを順次説明しながら、今日の九谷焼までの歴史を、作品を通して追体験できたのではないかと思われます。中でも、ちっとも青くないのになぜ青なのかと、「青手」の名称について質問があり、古来日本では、青田、青垣のように緑色のことを青と通称することからきていると説明すると、納得していただきました。

キッズ☆鑑賞講座
7月10日(土)
「第2回　古九谷へのまなざし」

今年度より、キッズ☆プログラムと題して、小学生を対象に常設展示室を使用しての鑑賞講座と体験講座を開講しております。今回は第2回「古九谷へのまなざし」です。

初回は何をするのか緊張気味にしていた小学生たちでしたが、今回はクイズや鑑賞活動のなかに、自分の感想・自分が好きだなあと思った作品についてもいくつか話しをしてもらいました。このほかに気になる作品についての質問も飛び出し、楽しい鑑賞活動の中に自分から積極的に参加し、一緒に参加していた保護者を驚かせた場面もあったほどでした。

次回の鑑賞講座は9月11日(土)「近代日本画に見る花の表情」です。この機会に私たちとたくさんの美術に親しみましょう。

各地の展覧会……9月

※開催日程、休館日、内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

ルーヴル美術館展　中世フランスの秘宝　9／12まで
新潟県立近代美術館(長岡市・0258-28-4111)

院展を築いた4人の巨匠　－大観　春草　観山　武山－
前期　9／12まで　　**後期**　9／14～26
富山県水墨美術館(富山市・076-431-3719)

子どもと遊ぶ現代美術　9／20まで
奈良県立美術館(奈良市・0742-23-1700)

神々の美の世界　9／20まで
京都国立博物館(京都市・075-541-1151)

第1回印象派展130周年記念　モネ光の賛歌
9／23まで
広島県立美術館(広島市・082-221-6246)

琳派　RIMPA　10／3まで
東京国立近代美術館(千代田区・03-5777-8600)

エルミタージュ美術館展
～エカテリーナ2世の華麗なる遺産～　10／17まで
江戸東京博物館(墨田区・03-3626-9974)

9月の行事案内　《入場無料（ギャラリートークを除く）・いずれも午後1時30分から行います》

月　日	行　事	内　　容	会　場
9／4(土)	美術講座	石川の近代日本画　（西田孝司　学芸専門員）	講義室
9／5(日)	月例映画会	日本の美　金閣銀閣(30分)	ホール
9／11(土)	キッズ☆プログラム	鑑賞講座「近代日本画にみる花の表現」　（吉村尚子　学芸主任） ※小学生対象の講座です。常設展示を鑑賞しながらの作品講座になります。	講義室
9／12(日)	ビデオ鑑賞会	国宝7　広隆寺・中宮寺(30分)	ホール
9／18(土)	美術講座	石川の彫刻　（宮　衛　学芸第二課長）	講義室
9／19(日)	月例映画会	日本の美　桂離宮(30分)	ホール
9／25(土)	ギャラリートーク	加賀藩の美術工芸　（寺川和子　学芸主任） ※展示室内で行われるため、常設展示の入場券が必要です。	常設展示室
9／26(日)	ミュージアムコンサート	**藤原真理　チェロ・リサイタル** **J．S．バッハ「無伴奏チェロ組曲第1番・第3番」ほか** **※入場整理券が必要です。6ページの応募方法をご覧ください。**	**ホール**

※9月の全館休館日は21日(火)～22日(水)です。

所蔵品紹介 147

存在感のある形の花器です。作者は若い頃から富士山や白山、木曾駒ヶ岳など様々な山を踏破しており、この作品が、実寸以上に存在感を感じさせるのも、そうした経験が作者の表現に結実しているからでしょう。

石膏原型をもとに朧銀(銅に銀を加えた合金)を素材として鋳造し、表面は伝統的な加賀象嵌の技法で加飾されています。加賀象嵌は、藩政期の初期に京都から招かれた金工職人が、武具などの装飾技法として普及させたものです。地金を平面的に彫ったり、文様的に彫ったりして板状や糸状の金・銀などの金属をはめこみ華麗に装飾するもので、幕府諸大名への贈答品にもなりました。 また明治時代以降は金工輸出品としてその精緻(せいち)な技法は世界的に評価されました。近年伝承者の問題で危機感が持たれていたおり、中川衛氏は基本から誠実に学ぶとともに、二重象嵌、三重象嵌を駆使して現代的な美意識による優品を数多く制作しました。

凛(りん)としてそびえ立つ山の唐松林をモティーフとしたこの作品にも、金、銀、赤銅(しゃくどう)、四分一(しぶいち)を用いた重ね象嵌の技法が駆使されており、遠近感が見事に表現されているとともに、器形の量感と装飾の繊細さが鮮やかなコントラストを生んでいます。

本年7月16日、国の文化審議会は中川衛氏を「彫金」の重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定するよう文部科学大臣に答申しました。

※第5展示室で展示中

象嵌朧銀花器「岑寂樹林」

中川　衛(なかがわ まもる)　昭和22年(1947)～

平成13年(2001)
第48回日本伝統工芸展 日本工芸会保持者賞
幅38.0　奥行21.0　高19.0(cm)

美術館パンフレットに中国語・韓国語が登場 !!

石川県立美術館の「美術館パンフレット」は日本語と英語の2種類がありましたが、新たに中国語と韓国語が加わりました。海外からのお客様にも対応できるようにと作成しました。国際化がますます進んできている今、日本の美術の伝統を、その中でも石川の誇る美術工芸を海外に紹介しようと努力しているところです。インターネットの当館ホームページにも英文ページがあるのをご存じですか？情報満載の充実したホームページですよ。パソコンの操作が苦手という方も是非一度ご覧になってくださいね！

日本語版

中国語版

英語版

韓国語版

次回の展覧会

特　集　加賀藩の美術工芸
(前田育徳会展示室)

特　集　秋の優品選　(第2～6展示室)

9月23日(木・祝)～10月24日(日)

休館日：9月21日(火)・22日(水)

石川県立美術館だより　第251号
2004年9月1日発行
〒920-0963　金沢市出羽町2番1号
TEL 076(231)7580　FAX 076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/